

邦人男性身動き取れず

持病・金銭の不安・パスポートなし



ロシア軍に攻撃されているウクライナで50年以上暮らす日本人男性が身動きの取れない状態となっている。命の危険を感じ、国外脱出を決意。隣国ポーランドを経由して日本に向かうことを希望するが、持病や金銭面の不安、パスポートを所持していないことがハ



ドルに。北海道で暮らす妹らは「何とか無事に帰国してほしい」と願う。(1面参照)

支援するNPO法人「日本サハリン協会」(東京)によると、ウクライナ中部シトーミル在住の降旗英捷さん(78)は樺太(ロシア極東サハリン)生まれ。太平洋戦争終戦後、日本本土へ引き揚げられず残留を余儀なくされた樺太残留邦人だ。

レニングラード(現サンクトペテルブルク)の大学を卒業後、サハリンに戻り1971年にウクライナに移住。ポーランド人の妻、長男に先立たれ、今は1人で暮らす。

最後に日本を訪れたのは2007年。年齢を重ね「きょうだいと一緒に暮らしたい」との思いを募らせていたが、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、訪日を見合わせていたという。

「無事に帰国を」願う妹

ウクライナから一時帰国した際、親族と記念写真に納まる降旗英捷さん(左から3人目)。右端は妹婦美子さん(2007年、新大塚空港(婦美子さん提供))



国した妹婦美子さん(72)は「ロシア軍は何をするか分からない。早くウクライナを離れてほしい」。ただ心臓に持病を抱える英捷さんが1人で長時間移動するのは困難。孫らが付き添い、車でポーランド国境付近に向かい、国境を越え首都ワルシャワから日本へ向かう準備を進める。

だが戦火を恐れ脱出する人で混雑する国境越えに時間がかかる可能性も。ポーランドにたどり着いてもパスポートはなく、日本行きのビザを申請、受領するには数週間が必要。その間のホテル代や食費も工面できない。

婦美子さんは「ウクライナに送金もできず、途方に暮れている。北海道で暮らす4人のきょうだいで帰国を迎えてあげたい」。「日本サハリン協会」の斎藤弘美会長は「ウクライナに取り残された邦人を助けるため日本政府も支援してほしい」と主張。募金活動への支援も呼び掛けている。

そんな中、ロシア軍によるシトーミルへの攻撃が3月に始まり、学校の建物が崩落するなどの被害が出た。空爆を恐れ、日中は中心部から離れて避難する日々を送る。ウクライナから札幌市に永住帰